

目次

序	竹内式部と宝暦事件研究の課題	3
第一章	竹内式部の略伝と先行研究	3
	二、宝暦事件と天皇・朝廷研究	12
	三、研究の視角	35
	四、本書の構成と概要	44
第二篇	竹内式部の学問と人物	
第一章	若林強斎と玉木正英への入門	53
	はじめに	53
	一、上京後の式部	55
	二、玉木正英の学風	61

三、若林強斎の学風	71
おわりに	76
第二章 望楠軒からの「義絶」とその要因	82
はじめに	82
一、三宅尚斎・久米訂斎との論争	85
二、沢田一斎と式部	102
三、小野鶴山と式部の「義絶」	106
四、玉木正英門下と望楠軒	110
おわりに	114
第三章 『靖献遺言』の講説と「継総惻怛」	122
はじめに	122
一、講説の成立	125
二、講説の基本姿勢	129
三、講説に見る「継総惻怛」の精神	131
おわりに	144
第四章 『奉公心得書』の成立と受容について—附・『事君辯』翻刻—	148

はじめに 148

一、『事君辯』の成立と信憑性 151

二、垂加神道の本質と『奉公心得書』の改作 154

三、『事君辯』（『奉公心得書』）の受容 169

おわりに 171

【翻刻】『事君辯』 178

第五章 『札問次第』に見る忠節と理想…………… 182

はじめに 182

一、『札問次第』について 185

二、式部の気風と奉行所 186

三、現実認識と理想——『保建大記』と「中臣祓」—— 189

四、皇居に対する忠節——『靖献遺言』と「君臣合体」—— 197

五、京都所司代の裁定 205

おわりに 209

第六章 「中臣祓」の講説と「人欲私欲」の神学…………… 213

はじめに 213

一、「中臣祓」に見る理想的治世	216
二、「人欲私欲」と「祓」の神学	221
三、式部の「人欲私欲」観と現実社会	225
四、式部の「人欲私欲」観形成の背景	229
おわりに	234

第二篇 朝廷に於ける垂加神道と宝曆事件

第一章 靈元天皇と山崎闇斎の「生き勸請」	241
はじめに	241
一、近世前期の学問と朝廷	243
二、山崎闇斎の生き勸請と吉田家	246
三、靈元天皇の御精神と生き勸請	252
おわりに	269
第二章 一條兼香と垂加神道・崎門学	276
はじめに	276
一、崎門学の修学	279

二、垂加神道の修学	290
三、「帝王治国論」に見る君徳涵養	299
おわりに	304
第三章 松岡雄淵の学問と朝廷	310
はじめに	310
一、「日本魂」論の淵源	313
二、『神道学則日本魂』と玉木正英の破門	315
三、宝曆事件前後の雄淵	324
四、隠居後の雄淵	329
おわりに	331
第四章 竹内式部の思想受容とその伝播	338
はじめに	338
一、桜町天皇主導の朝廷と垂加神道	341
二、桃園天皇の東宮傳と和歌御修練	360
三、「官位御定」と式部門弟	367
四、式部門弟と吉田家（松岡雄淵）・吉見幸和	373

おわりに	377
第五章 桃園天皇への『日本書紀』御進講の「目的」	386
はじめに	386
一、『進講筆記』と『神代卷講義筆記』	388
二、竹内式部の天皇観	394
三、御進講の要諦	399
おわりに	410
第六章 宝暦事件再考	416
はじめに	416
一、御進講の開始	419
二、桃園天皇の御製と式部門弟の御進講	422
三、式部門弟の朝廷認識と奉公精神	431
四、一條道香による御進講の反対	442
五、桃園天皇の大御心	450
おわりに	461
第七章 宝暦事件後の朝廷と垂加神道	469

はじめに	469
一、宝暦事件後の式部門弟と垂加神道	471
二、烏丸光栄の子息と朝廷	480
三、光格天皇の御治世と垂加神道	485
四、裏松光世の学問精神	493
おわりに	499
終章 本書の成果と課題	507
一、竹内式部の実践神学	508
二、大御心の実現と垂加神道	512
三、宝暦事件に於ける歴史的神学的意義	521
あとがき	529
人名索引	540